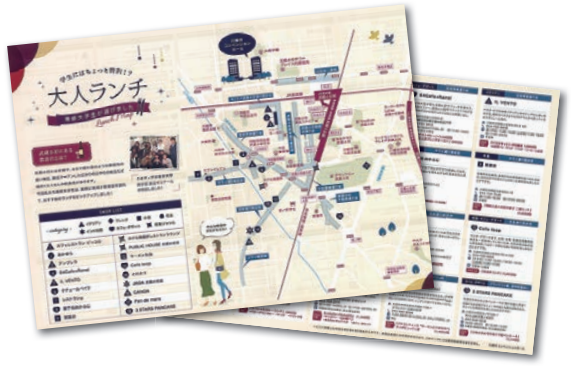
武蔵小杉・新丸子のランチマップ作製

商・渡辺達ゼミ

渡辺教授（右端）とゼミ生

完成した二つのマップ。上が新丸子、下が武蔵小杉



商学部・渡辺達朗ゼミの3年次生14人が、4月16日に開館した川崎市コンベンションホール（川崎市中原区）の周辺のランチマップを作製し、開館記念式典で紹介された。マップは同ホールの最寄り駅である武蔵小杉駅（JR、東急）、新丸子駅（東急）の2種類。それぞれ、和食、イタリアン、ラーメン、カフェ・デザートなど18の飲食店を紹介している。店内の雰囲気やおすすめのメニューなど、ゼミ生が自らの足で集めた情報が盛り込まれている。

渡辺ゼミは「地域マーケティングとまちづくり」を研究テーマに、東京都千代田区や川崎市多摩区などのまちの魅力を発信している。今回は川崎市からの依頼を受け、昨年10月に活動をスタート。ホールは35階建てツインタワーマンションの低層階にあり、国際会議や学術会議、展示会などでの利用が想定されている。

マップは、ホール来場者向けに〝大人ランチ〟をテーマに設定した。事前調査で掲載候補店をリストアップし、武蔵小杉、新丸子の両地域に何度も足を運び、実際に各店舗で料理を食べ、原稿にまとめた。デザインはプロのデザイナーが担当したが、学生目線でイメージやアイデアを提案した。

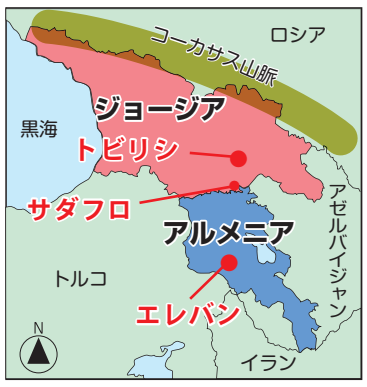
武蔵小杉編を担当したゼミ長の鈴木莉子さんは「なじみのない地域だったが、まちを歩いたことで、店舗だけでなく、まちの魅力を知ることができた。マップが店舗に行くきっかけになれば」と話す。副ゼミ長の吉田航さんは「みんなで意見を出し合って作成した紹介コメントをぜひ読んでほしい」と呼びかけた。

渡辺教授は「短期集中の活動だったが、地域と向き合う良い機会となった。普段何気なく通り過ぎているまちに、おいしい飲食店、面白い店、特徴的な施設があることを知るきっかけになったのでは」と成果を語った。

マップは、同ホール来場者に配布されるほか、ホームページで閲覧、配信される予定。

佐竹教養ゼミ「文明を歩く」

中央アジア2カ国を訪問 現地大学生と異文化交流



教養テーマゼミナール「文明を歩く」（指導＝佐竹弘靖ネットワーク情報学部教授）のゼミ生10人は2月19日から28日まで中央アジアのジョージア、アルメニアの2カ国を訪ね、日本語を学ぶ現地の大学生たちとお互いの文化を紹介し合い交流を深めた。

2カ国は中央アジアとヨーロッパを分けるコーカサス山脈を擁しており、雄大な大自然や古代キリスト教文化、歴史に触れることができた。同ゼミはこれまでパキスタン、トルコ、シリア、ヨルダンなど15カ国以上を訪問している。今回参加した学生2人に印象的だったこと、旅で学んだことについて聞いた。

アルメニアの学生に書道を教える佐竹ゼミ生

ゼミ生は事前に歴史、風土、宗教などについて学び旅に臨んだ。

ジョージアの首都トビリシが出発点。トビリシ自由大学で学生と交流し、古都ムツヘタに向かった。世界遺産に登録されている「ムツヘタの歴史的建造物群」などを見学。徒歩で国境を越え、アルメニアの首都エレバンへ向かった。エレバン国立大学の学生たちと交流した。

柿原直也さん（経済4）と小林怜奈さん（経営4）はともに海外旅行に興味があり参加した。「まったく知らない国だったので、今までとは違う体験、異文化に触れることができると思った」と柿原さんは話す。

トビリシ自由大学では20人以上の学生と交流し、写真、スライドなどで日本の漫画、アニメ映画、繁華街などを紹介。柿原さんは得意の合気道を実演し、大きな拍手を浴びたという。

小林さんは「日本のアニメに興味を持つ人が多く、とても楽しい時間を過ごすことができた」と話す。

一番印象に残った場所は、ジョージア側の国境の町サダフロだという。切り立った岩、険しい渓谷が延々と続き、壮大な景観に圧倒された。

山道は車1台通れるくらいで、「荒涼とした自然の中に突然、石造りの修道院が現れ、キリスト教が人々の暮らしの中にしっかり根付いていることを実感させられた」と柿原さん。

小林さんは「国境には銃を持った兵隊が警護にあたっていて、日本がいかに平和なのかを感じた」と話す。

現地の大学生の勉強熱心さにも驚いたという。「日本に来たことがないのに、日本語を流ちょうに話せるのはすごいと思った。自国の歴史、文化、国の成り立ちについても詳しく、自分たちは、もっと学ばなければならないと痛感した」と柿原さんは話す。

佐竹教授は「一生懸命日本語や日本文化を学んでいる現地の大学生と交流を持ち、参加学生たちは将来の日本と両国のあるべき関係の姿を深く考えたようだ」と語る。

学生部セミナー「台湾へ行こう」

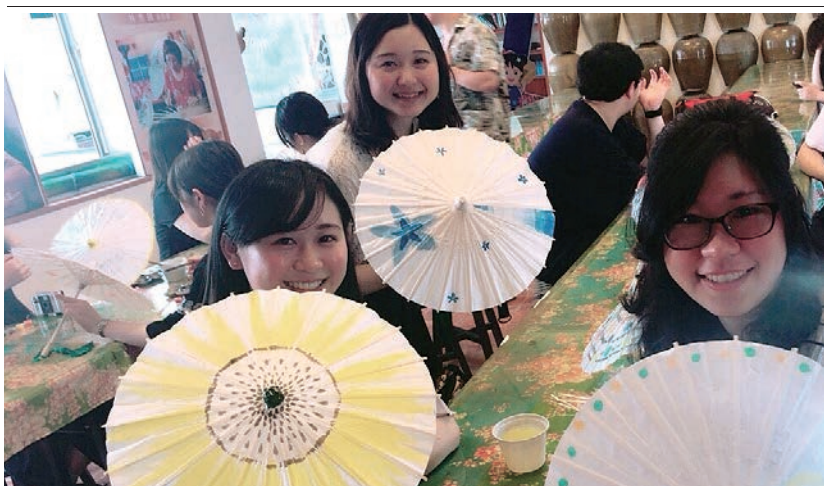
交流通し歴史と文化知る

佐藤伽純（文3）

学生部による海外研修セミナー「台湾へ行こう」が3月1日から8日まで開催された。学生11人が参加し、国際交流協定校の国立中山大学（高雄市）での語学研修や、中山大学生との交流、フィールドトリップや文化体験を通じて、台湾への理解を深めた。学生部セミナーは異文化体験を通して多様な価値観を養うことを目的に、毎年春期休暇中に実施している。参加者の中から2人の体験記を紹介する。

語学研修を受けた中山大学はキャンパスが広く、海と山に囲まれていて、野生の猿がキャンパスにいるなど自然が豊かであった。

語学研修は自己紹介から始まり、数字や買い物など、実用的なことばを教えてもらった。会話が中心で、先生は明るくて面白く、楽しみながら学べた。実際に買い物するときに現地の言葉で注文したり、簡単な会話ができたりと、学んだことを生かすことができた。


傘の産地として知られる美濃で傘作りを体験

おおらかで友好的な人々

尾山結花里（法2）

台湾での8日間の研修は、刺激的な日々の連続であった。この研修により、台湾は人と人との距離感が近いおおらかな人が多いところだという印象を持った。

私が最も強くそれを感じたのは、中山大学のユイさんという学生と共に、大学から近い旗津半島の名所となっている虹の教会に行くため歩いていた時のことである。なかなか目的地にたどり着けず、道を間違えているのではないかという不安を感じていた。そんな時に、信号待ちのため車が1台、私たちの前で停車した。すると突然ユイさんがその運転手に向かい「虹の教会はどっちですか?」と尋ねたのだった。

運転中の見ず知らずの人に突然道を聞いたユイさんにもびっくりしたが、それ以上に運転手が信号待ちにもかかわらず、話しかけられても嫌な顔をせずに、丁寧に教えてくれたことに驚いた。この経験から台湾には友好的な人が多いのではないかと思った。

研修の前、インターネットなどで台湾のことを調べた。しかし、この研修を通じて、メディアで得た情報は表面的なものでしかないと思った。実際に現地に行き、人々と交流をすることで、その国の内面的な部分に触れることができるのだと、実感することができた。

台南市で古跡・安平古堡や、古い町並みが続く安平老街を見学し、美濃ではお茶作り・傘作りを通して歴史や文化を知ることができた。渡航前の研修でアドバイスを受けた専大に在学する台湾からの留学生も合流し、観光地を一緒に巡った。また、台湾在住の専大卒業生に夕食会を開いていただき、さまざまな人と交流ができた。大皿の料理を共有し会話も弾んで楽しかった。

今回、中山大学でお世話になった学生の1人は9月から専大に留学するので今度は日本を紹介したい。また、同じ専大生ながら名前も顔も知らなかった人と海外で団体生活を送ることは不安だったが、現地では協力し合い、自分の役割を見つけて行動できた。これからも人との出会いを大切にしていこうと強く思った。